



畳敷きの会場で作品を見た

サビエル生誕五百年

巡礼の道

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

471

全作品が一堂に
フェルメール・光の王国展(上)

オランダの画家、フェルメール。レンブラントとともに十七世紀に活躍し、「真珠の首飾りの少女」などは日本でも展示され、ファンも多い。現存する作品は三十七点といわれる。

それらフェルメールの作品だけが集められた、夢のような美術展が「フェルメール・光の王国展」である。八月三十一日まで京都祇園で開催され、最終日に日帰りで見に行った。

これまでフェルメールの作品に特に関心があつたわけでもなく、絵画は全くの素人だが、一昨年から今年にかけて旅した先々でフェルメールの絵に出会う。

ロンドンのナショナル・ギャラリーで「ヴァージナルの前に立つ女」ほか一作品、オランダ・ハーグのマウリッツハウス王立美術館で「真珠の耳飾りの少女」ほか二作品、アムステルダム

国立博物館で「牛乳を注ぐ女」ほか二作品、ドイツ・フランクフルトのシュテューデル美術館で「地理学者」。さらに東京の国立新美術館であったルーブル美術館展で「天文学者」、国立西洋美術館で「聖ブラクセデス」と、フェルメールに導かれるように六カ所で十一作品を見たのである。

フェルメールに限らず、一人の画家の全作品を一堂に集めた美術展は不可能な話だが、それを実現したのが「フェルメール・光の王国展」である。

この美術展を立案・実現させたのは日本人の生物学者、福岡伸一氏。ベストセラー「生物と無生物のあいだ」の著者としても有名である。

フェルメールの作品には行方不明や門外不出のものもあるのに、どうして一堂に集めることができたのか。答えは、本物よりも本物らしい

絵、最新のデジタル技術とプリンティング技術を駆使した原寸大の複製画で、福岡氏は「リ・クリエイト」、再創造させたのだという。

フェルメールの絵が描かれたのは今から約三百年前。色彩の劣化やひび割れなどは仕方のないことだ。しかし、リ・クリエイトされた作品は描かれた時の状態に近く、本物よりも本物といわれるゆえんである。

この美術展で感動したのは、本物以上に本物に近い原寸大の作品もさることながら、こんな美術展を実現した福岡氏の情熱に対してである。絵の専門家でもない彼は、たまたま



王国展の入場チケットから

ニューヨークに留学中にフリック・コレクション美術館でフェルメールの「兵士と笑う女」に出会い、以来、四年かけて世界各地のフェルメールの作品を見て回る。そして、フェルメール作品だけの美術館というアイデアが浮かんだという。

誰にでもいろんな出会いがある。その出会いから新しいものを産み出すことの大切さに感動したのである。

祇園の歌舞練場の畳の上で日本庭園を背景に作品を見ながら、フェルメールもまた、一つ一つの作品にいろんな出会いがあつたのだろうと思ひながら音声ガイドに耳を傾けた。